含光君の恋文②

丹を結ぶ

しばた三歳

目次

サンプル【含光君と恋文】……
【含光君へ恋文】……
サンプル【丹を結ぶ】……
【俺の、わたしの、最愛の】……
【あとがき】……

【含光君と恋文】

「なぁ。俺の夫はせっかく美人ちゃんなのに、どうしてあんまり笑わないんだ？」

二人だけの夕餉を終え、まもなく戌の刻を迎える。先ほどまで夕陽に照らされ茜色に染まっていた静室も、そろそろ色を失いつつあった。

文机の前に座った藍忘機は首を振る。分からない。

ひょいと藍忘機の膝に乗り、魏無羨は機嫌よく口を開いた。

「お前は筋骨隆々のくせに、表情筋だけは乏しいもんなぁ？」

道侶の白い頬を両手で包み、むにむにと摘む。

「知ってるか？　筋肉は揉めば育つらしいぞ。お前の頬も、俺が揉んで育ててやろうか？」

からかうように頬を揉まれ、藍忘機は少し考えた。

魏無羨の細い腰を抱いていた両手を、「ならば」と下方に伸ばす。

「おっ？」

突然尻を鷲掴みにされて、魏無羨はきゅっと身を縮めた。

「ははっ、やるなぁ含光君？　俺がお前の頬を育てるなら、お前は俺の尻を育てるのか？」
「うん」
揉んで育つのならばいくらでも。真顔でそう言う藍忘機に、
「うーん、困ったなぁ。お前はただでさえ俺の尻が好きなのに、これ以上育っちまったら、俺は一体どうなる……、んん」
べらべらとよく回る舌を止める一番良い方法は、我を忘れるほど心地よくさせる事だ。
体を繋げてひと月、ようやくそれを学んだ藍忘機がおもむろに指の位置を変えようとした、その時。
「……失礼します」
穏やかで耳に心地よい声が、扉の外から遠慮がちに聞こえて来た。互いにほんのり紅潮した顔を見合わせる。魏無羨は苦笑し、藍忘機の額に小さく口付けて、その膝から降りた。

「思追。入りなさい」
少し乱れた下衣を整えて、藍忘機が声をかける。一呼吸おいて、扉がすっと開かれた。
「含光君、魏先輩。お寛ぎのところ申し訳ありません」
「おー、思追。お前は俺たちの子だろう。いつだって大歓迎だ」
藍忘機の隣に座した魏無羨が、両手を広げて招く。

にこりと笑った藍思追は二十三を数え、ますます精悍さを増していた。
穏やかな笑顔や人当たりの良さは沢蕪君に。卓越した行動力と驚くべき腕力は含光君に。そして最近発覚した、意外なほどの酒の強さは魏無羨に似ていると、もっぱらの評判であった。
「思追、珍しいじゃないか。どうしたんだ？」
養子とはいえ、諸々わきまえている藍思追がおのれの用件でここ静室を訪れることはめったにない。藍忘機に着座を促され、ふたたび礼を執ってから座すると、敬愛する二人の顔を見ながら口を開いた。
「先月、魏先輩が作られた新しい代弁符の事です。頭の中で筆記した内容を、他者の口を借りて発する……」
張氏の術返しにより、一時的に口が開かなくなった藍忘機のために、魏無羨が一晩で書き上げた霊符の事だ。
「あぁ。アレは面白かったよな」
魏無羨が頷けば、藍忘機は無言のまま、懐からその符を取り出してそっと撫ぜる。
「はい。この思追も、含光君の代弁役を務められて光栄でした。……実は昨日、他仙家の方が悪霊に共情を試み、危うく取り込まれそうになっているところに遭遇しまして。清心音で手助けをさせて頂いたのですが」
「ほう」

【丹を結ぶ】

「これより、房中術――陰丹双修をはじめる」
寺院で朝礼でも始めるかのような、静謐な表情と厳かな口調。真顔の藍忘機を前に、魏無羨はぐっと言葉に詰まった。
（くっそ真面目だな、藍湛！）
そう言って吹き出してしまいたいのは山々だが、あまりにも真剣な雰囲気にそれも躊躇われる。結局、にやけそうになる口元をさりげなく隠し、おのれの鼻先をこしょこしょといじりつつ、
「……よろしく、おねがいします……？」
なんとも中途半端な拱手をするに留めた。

長年知己だった二人が番となり、まもなくふた月になる。
三月、桃花の盛りに想いを告げあい、ひとつになった。
四月、結丹と双修について、互いの考えを確認した。

このとき魏無羨の快諾を得た藍忘機は、翌日より猛烈な勢いで執務を整理しはじめる。昼夜を問わず、常軌を逸した働きぶりに、見かねた姑蘇の男たちが名乗りを上げた。
まず沢蕪君が、閉関明け直後にも関わらず宗主として復帰。
思追と景儀はその補佐を。
そして藍啓仁は、今まで藍忘機が行ってきた仙督の執務をまるごと引き受けた。深々と腰を折って謝意を伝える藍忘機に対し、
「……成すまで戻るな」
目を閉じたまま、ムスッと返答する。何をとは言わない。叔父は一見では分かりにくいが、不器用な愛を抱えた人だと改めて思う。

さてそんな藍家の男たちと共に、魏無羨もまた独自の方法で藍忘機を補佐していた。次から次へと新たな霊符や法具を開発し、姑蘇藍氏の面倒な、もとい、慇懃丁重で多岐にわたる執務を劇的に減らしてまわる。
改良を重ねた代筆符では、藍忘機が何をしていようと――寝ていても、よそ事を考えていても、それこそ双修に励むその真っ最中であったとしても、符を使った質問に対し自動手記で回答できるようにした。
また移動においても、伝送符ほど霊力を浪費する事なく、あらかじめ決めた場所へと瞬間的

に移動できる簡易伝送符を。
そして双修の間、少しでも藍忘機の手間を減らすべく作った地獄石（水に入れれば瞬時に湯がわく）は、藍忘機はもちろんの事、姑蘇の子弟たちにいたく喜ばれた。ロさがない景儀などは、
「やるなぁ魏先輩！　コレものすごくありがたいよ。今までで一番役に立ってるんじゃないか？」
などと無邪気に喜んでいる。
イヤイヤもっとあっただろう、命を懸け身を挺してお前らを守った瞬間が今までに何度も。頼れるかっこいい魏先輩像が、地獄石ごときに一瞬で負けたのか。悔しいから景儀の石には三回限りの制限でもかけてやろうか。
そうこうするうちに、半月足らずですっかり準備は整ってしまい、姑蘇藍氏の結束の固さはさすがだな、いえいえ含光君の人望の厚さによるものです、イヤやっぱり老祖って凄いんだな恥知らずだけど魏先輩という各々の感想を胸に、冒頭へ戻る。

「まずは体交法から。体的交接により気を交わらせる」

相変わらず敬虔な仏僧のような面持ちの藍忘機と対面する。

時は亥の刻、魏無羨の陰気が強まるよう、夜の時間帯を選んだ。互いに沐浴も済ませ、純白の寝着を羽織っている。

「期限は半月。丹田の核が出来た場合はそのまま期限を延長して核を育て、結丹を目指す。しかし核すら作れなかった場合は、いったん半月で双修を止め、また機を見て挑む事とする」

「わかった」

「通常は男女で陰陽交わらせ、双方ともに循環させて修練を行うが、此度はまずわたしが陽気を、魏嬰が陰気を高めてから交合する」

「うん」

「そしてもっとも通常の双修と異なるのは、練りあわせた気を吸うのは魏嬰、おまえだけだと言う点だ。わたしの事は気にせず、必要と思われる量の倍は吸え」

「倍……」

「そうだ。おまえは肝心なところでいつも妙な遠慮をする。二倍吸うと約束しろ」

「……ハイ」

不承不承といった体で魏無羨が頷くと、藍忘機は瞳を閉じた。寝台で向かい合い座禅を組む

と、瞑想しておのれの気を練り上げ始める。

昔から一つ所にじっとしていない魏無羨だったが、瞑想だけは別で、いったん瞑想状態に入ると周囲が心配するほど長時間瞑想し続けるのが常だった。

師父であった江楓眠いわく、

「阿嬰には仙師としてもっとも重要な才がある。動静結合だ。体を動かす修練では気を静め、逆に、体を静める修練では気を動かす必要があるが、阿嬰は最初からこれが出来ている。大切に育てなさい、その才は誰もが持ちうる物ではない」

そう言って、誇らしげに頭を撫でてくれた。

何を言われているのか、難しい言葉の意味は分からなかったが、それでもあの優しい目と、あたたかく大きな掌は忘れる事が出来ない。

浮浪児として過ごした日々――他者から忌み嫌われ、いつどこから石が飛んでくるか、背後から襲われるかと神経を尖らせ続けたあの四年半。身も心も乾ききった海綿のようだった魏無羨に、江家が与えた衣食住と、仙師修練の基礎、そして浴びるほどの愛情は、干からびた魏無羨をすっかり潤し、生来の甘ったれをむくむくと増長させて余りあるものだった。江晩吟あたりは

「フン、父上と姉上のせいにするな。お前が勝手に調子に乗ったんだろうが」
などと吐き捨てるだろうが、そう言う江晩吟だって魏無羨に愛を与えた一人だ。本人は決して認めようとはしないだろうけれども。

「魏嬰」
小声でいさめられ、魏無羨はハッと我に返る。誰かと共に修行をするのは久しぶりで、思わずかつての蓮花塢に想いを馳せてしまっていた。切ない記憶に蓋をした魏無羨は、（すまない）と向かいの藍忘機に合図を送る。今度こそと心を無にして瞑想に入り、赤と黒の静謐な世界に全身をひたらせた。

（続きは紙の本でお楽しみください）